セゾン文化財団/KYOTO EXPERIMENT 共同主催

創造環境イノベーションプログラム報告会+シンポジウム

「舞台芸術における多様性とは? 日本における外国コミュニティと地域との関係 |

2021.10.8(金)

第1部 17:15-18:15

第2部 18:30-20:00

ロームシアター 京都 パークプラザ 3F 共通ロビー

「第2部]

シンポジウム

■スピーカー

安里和晃(京都大学 文学研究科国際連携文化越境専攻 准教授) ウスビ・サコ(京都精華大学学長)

■モデレーター

塚原悠也、ジュリエット・ナップ(KYOTO EXPERIMENT 共同ディレクター)

【プレゼンテーション①】

「多様性について考える」

安里和晃氏(京都大学 文学研究科国際連携文化越境専攻 准教授)

第1部の「観客の多様性」の議論を聞いて、「では、芸術の担い手の多様性はどうなのか?」 ということが気になった。今日は私の研究活動の経験から、多様性に付随する「困難なこと」 について紹介していきたい。

●多様性の複雑さについて:台北の事例から

多様性は近年の流行り言葉になっているが、その中身を具体的に見るのは容易ではない。 多様性は決して平等ではなく、極めて不平等な格差の上に成立している側面があり、どの局面から見るかによって、見える真実も異なってくる。

台北を例にあげましょう。現在約24万人の外国人家事労働者が就労していますが、その多くはインドネシアから来た人たちで、現地の高齢者・障害者ケアを支えている。その家事労働者たちが毎週日曜日になると、台北駅のど真ん中にカラフルなジルバブ(スカーフ)を身につけて集まり、休日を楽しんでいるのだ(写真①)。台北駅は、外国人労働者や利用者のために、憩いの場として駅を開放している。

写真②は、インドネシア人家事労働者が自国で研修を受けている様子である。誰もが髪をショートカットにしており、スカーフの着用も許されていない。なぜなら、女性的な格好をしていると、派遣国の男性の雇用主を誘惑すると思われるかもしれないし、他国でムスリムだということがわかるとイメージの低下を危惧する人もいるからだ。そのため送り出し機関はあえてジェンダーニュートラル、宗教上のニュートラルにして送り出すという戦略を

とっています。人々はこのように身体を管理されたうえで出稼ぎ労働に出ています。つまり、多様性といっても厳しい現実というのが背景にあることも多いのです。

「多様性」という言葉は聞こえはいいのですが、いくつかの流れがあります。すべての人々に尊厳を、という意味において、人権擁護の視点で言われることもあるでしょう。人口減少社会においては「女性も、障害を抱えた人も、退職者もがんばって経済活動に貢献してください」というように、ある種、経済イデオロギーが支配する中で、政府や経済界が音頭を取って促進されることもあります。この言説は日本においても強いと思います。

長い間「一億総中流」という集団的に醸成された意識の下、"外で働く男性、家で支える女性"という、露骨な性役割分業によって経済を成長させてきたにも関わらず、人口減少社会のもとにおいては経済を維持するために「多様性の時代だから、女性たちも活躍してください」といっているようにも見える。このように多様性を尊重する言説がどのような理由で発せられているのかを考えることは極めて大切です。





写真①

写真②

●多様性の複雑さについて:在留ベトナム人の事例から

図③の左側は、在留外国人の不法残留者数(不法滞在者)、技能実習生、失踪者数、刑法犯検挙件数を示したグラフである。すべての項目でベトナム人が1位になっています。報道でもこうしたニュースが出ているので、ご存じの方も多いかもしれません。他方で、もうひとつの指標(右の表)を見ると、まったく異なる側面が見えてきます。これは、ベトナム人の介護福祉士国家試験の合格率です。経済連携協定によって来日した介護職員(介護福祉士候補者)は国家試験を受験することが求められており、その結果をグラフで表したものです。これによるとベトナム人受験者の合格率は90%を超えています。ちなみに、日本人がほとんどを占める全受験者数の合格率が70%程度に過ぎないことを考えると、きわめて高い合格率です。日本固有の試験である介護福祉士であるにもかかわらず、ベトナム人の合格率が高いのは驚きです。

また、左側の不法残留者や失踪者、あるいは刑法犯検挙数も多いベトナム人が、なぜ、これだけ優秀な成績を残せるのかといった疑問がわいてきます。これはいい制度の下で来日した人々はいい結果を残し、悪い制度の下で来日した人々は、悪い結果に落ち着くということです。来日者で問題が生じるケースは介護の分野ではなく、技能実習制度に多くあります。昨今、報道でも取り沙汰されているように、技能実習生は制度自体に欠陥があります。例えば、来日のための多額の借金問題です。100万円の負担も珍しくなく、来日するまでに借金漬けにされることが多々あるわけです。そこに賃金未払いなどがあれば、途端に困窮してしまうわけです。介護の場合は、きめ細かな介護福祉士国家試験に向けた研修が導入さ

れています。来日する人々は来日までに N3 を取得することとなっていますが、技能実習制度と異なり来日のための自己負担はほとんどないため、国家試験対策に時間を割くことができます。つまり、どのような制度や社会構造が背景にあるか、というのを理解しなければ、多様性の背景にある問題やそのからくりがわからないまま、外国人は罪を犯すといった誤解を生じさせることになります。制度は批判されるべきですが、多様性が誤解されるのはよくありません。



図(3)

● 芸術と多様性について

こうした事例を見てくると、多様性に関する真実は「どこをピックアップするか」によって見方が変わってきます。構造を説明せずに多様性の負の側面を強調すれば、誤った見方をすることになるでしょう。どこをピックアップするか、どこに焦点をあてて報道するか、といった表現活動は、社会の力学の中で決定されることが多ので、表現活動は責任の大きな仕事となります。「他者を語る」ことも、多様性への道のりも、決してふわふわした生やさしいものではありません。多様性と向き合うためには、学術も、芸術も過去の価値観から脱却が必要となるでしょう。例えば、男性だけでなく女性や高齢者、若者、障害者、外国出身者も含めて社会を築き上げるといった「多様性が真の豊かさへのプロセスである」という新しい価値観で時代を創ろうと思えば、強い意識づけをもって行わない限り実現できないでしょう。こうした点は表現活動にも表れてくると思います。

【プレゼンテーション②】

「芸術祭や大学における多様性―京都精華大学の経験からー」 ウスビ・サコ氏(京都精華大学学長)

● 自分自身の経験から

私は西アフリカのマリ共和国の出身である。両親と妹と弟の 5 人家族だが、実家には常に 20 人以上が寝泊まりしていた。中には親戚もいたが、半数以上は、親戚の知人というような、「あんた 誰やねん?」というまったく知らない人たちである。近くに用事があるから泊まっていると聞くが、気がつけば 1 年以上も実家にいたりする。私はそういう環境の中で育った。

私は2002年に日本国籍を取得したが、実は取得前より取得以降の方が多くのトラブルに

見舞われている。何度、各地の空港で足止めをされたことか。必ず言われる言葉が、「あなたは本当に日本人なのか?」。入国審査官のなかには、私が帰化したスポーツ選手だと思い込んで、どのジャンルなのかを推測し、「力士か?」と言ってくる人もいる。入国審査に一番時間がかかるのがヨーロッパ。「あなたの名前は日本語っぽくない」とまでいってくる。多様性を最も重んじている地域のはずだが、現実は異なるようである。

日本では、マリ出身だと言った瞬間に「うらやましいね」と言われることも多い。「サコさんの家からどんな動物が見えるの?」「サコさんは目がいいんでしょう?」と。ものすごいステレオタイプで、私を見ようする人が多いと常々感じている。

●日本における多文化共生の課題

私は京都精華大学の学長として「ダイバーシティ(多様性)」を推進しているが、国として実現するには大きな壁があると感じている。多くの外国人を受け入れることが、イコール多様化ではない。メディアではよく、「京都精華大学は多様性を重んじる大学だ」と言っていただくが、食事ひとつとっても、現実はそう簡単ではない。例えば、私はムスリムなので豚肉を食べないが、大学行事で支給されるお弁当には、20年たった今でも豚肉が入っている。今回は大丈夫だからと届けてくれる中身は、合挽き肉のハンバーグという有様である。

これはお弁当屋さんの意識の問題でもあるが、日本社会は異文化をあまりに軽く考え過ぎている。なかには「外国人に合わせるのではなく、日本語と日本文化の素晴らしさを教えればいい」という人もいるが、これは、ドイツの状況に類似している。ドイツは移民政策に力を入れているが、いざやってみて気づいたのは「我々は労働力を呼んだが、人間がついてきた」(スイスの作家、マックス・フリッシュの言葉)にも通じる現実だ。国境を越えてやってくるのはひとりの人である。その人なりの宗教や価値観を持っている人とどう付き合っていくかが重要であって、ただ、移民の数を増やせばいいのではない。

フランスを例にすると、フランスでテロ事件を起こす人の多くが移民の2世、3世と言われている。決して外国人の犯罪ではなく、フランスで産まれ育った子どもたちが、社会から阻害され、抑圧された結果であり、受け入れ国の責任を認めずにただ糾弾するのは違うのではないかと感じている。一方、香港の例になるが、香港も台湾と同じ状況で、フィリピン人のメイドが働いており、やはり彼らは日曜日にパブリックスペースにやってきて過ごしている。しかし、香港人にとって彼らは不可欠な存在なので、「メイドが集まることで公共空間が乱される」とは決して考えない。そうした受け入れの姿勢はとても重要だと感じている。

以前、精華大のマンガ学部の学生が私のイラストを描いてくれた。しかし、肌の色も髪型も私とは似つかぬもので、まるで外国映画で出てくる「典型的な黒人」に過ぎなかった。おそらく、日本人は芸術表現をする際の価値観も多様化してないから、今まで見聞きしてきた概念でしか描くことができないのだろう。自分とは全く異なる他者を表現するためには、観察力を鍛えなければならないが、日本ではその観察力すら長くフレーム化されてきたようだ。今後の芸術教育の課題のひとつであろう。

私は来日し、いろんな人と出会うことで、「自分自身が、他人とどのように違うか?」ということを感じ、考え続けてきた。お互いの違いがわかることでで、はっきりと自分のアイデンティティを認識でき、同時に他者理解が深まっていった。だから、無理に多様性を定義

● 多様性を認め、学び合う大学を目指して

京都精華大学には現在、約30%の留学生がいる。私は学長として「ダイバーシティ宣言」を行なっているが、そこには、大学に携わるすべての人がお互いに違いがあることをしっかり理解し、ともに学び合って、成長していく大学にしたいという思いを込めている。

誤解されることが多いが、留学生は旅行客のような「お客さん」ではない。大学というコミュニティ、京都市民の一員として、個人の尊厳を持ちながら、自分らしく社会を関わっていってほしいと願っている。そのためにも、私は留学生たちに「彼らが安心できる居場所」を積極的に持ってほしいと思うし、そのサポートをしていきたいと考えている。「社会に居場所があるかどうか」という視点は、留学生に限らず、外国人の孤立を防ぎ、多様性を実現する上でとても重要になってくるだろう。

留学生が孤立しないよう、本学の学生寮では、日本人と留学生をペアにする試みを行なっている。過去にはムスリムの生徒による「ヒジャブのワークショップ」を開催したこともある日本人学生と留学生を区別することなく、「学生という、ひとつの大きな枠組み」でとらえたいと考えている。

学生をどんどん、アフリカのフィールドワークに連れ出すのも私のスタイルだ。異文化に ふれることは、自分自身と真に向き合う機会となる。こうした活動を、声高に多様性と呼ぶ 必要はない。まずは、世界にはいろんな人がいることを学生たちに知ってもらえる環境を作っていきたいと考えている。

【ディスカッション(抜粋)】

● 公共の場のあり方について

ナップ(KYOTO EXPERIMENT): お二人のお話で、外国人労働者が、公園や駅などのパブリックスペース(公共の場所)を、居場所や心の拠り所にしているという話があった。その意味では、私たちのフェスティバルや劇場を「開かれた公共の場」として、活用していける可能性があるのではないかと感じた。作品を通して観客にアプローチする以前に、「場所」自体を提供することに大きな意義があるのかもしれない。

塚原(KYOTO EXPERIMENT): KYOTO EXPERIMENT は、国や京都市の補助金などで運営しているので、「広くアクセスされる」ことが理想ではある。しかし、それだけではなく、安里先生がおっしゃられたように、運営側や演じる側が、「どのように社会を見ているのか」「社会の声を聴けているのか」という視点はとても大切だと感じた。

サコ:公的な支援金は大切ですが、そればかり気にしていたら芸術は生まれない。私は来日後に、日本の公共性の意味が、諸外国と大きく違うことにショックを受けたことがある。日本の公共空間は、公によって管理されるもので、「住民のものである」「住民みんなでシェアしている」という意識が希薄である。日本の公園にいくと禁止事項ばかり書いてあって、どうしていいかわからなくなってしまうのだ。こうした「公共の場」という概念を、芸術の力で一般市民に開いていくことができると思うし、それが芸術の役割であると思う。助成金を

もらって挑むには難しいテーマかもしれないが、そこには、やるべき価値がある。KYOTO EXPERIMENT として、このあたりをどう考えているかも重要になってくるだろう。

● 日本の芸術教育について

安里: 先ほど、「ぶっ飛んだ方がいい(もっと斬新で自由であってもいい)」と述べたが、 実はこれはとても難しい。「~~すべきだ」という規範が強ければ強いほど、斬新で自由な 発想を実現するのは難しくなるからだ。発想自体がパターン化するという意味ですが、それ だけではなく、表現すること自体に勇気が必要になるからである。「ぶっ飛んだ」作品を創 るためには、共通した教育体系における活動ではなく、差異化された多様な価値観が問われ、表現者の人生そのものが問われる。

日本は、50%を超える高い大学進学率を維持し、ボトムアップがなさされたが、芸術に関しては没個性で平均化され、教育レールに乗っかる形でしか表現できない人が増えている。これは学問も同じことがいえる。それだと枠組みの内部でしか発想できず、表現ができないことを意味する。その意味で、アジア諸国の作品は今回の作品を見ても、多くの日本人の視点からすると「ぶっ飛んだ」ものが多い。自由の抑圧や貧困、政府や権力との関係、ポスト植民地、独立の問題など、苦悩する自身や社会の状況に絡めた表現が多く、そういう意味で表現活動は当事者自身の魂の叫びでもある。

ナップ: KYOTO EXPERIMENT はこれまで、自由で実験的、そしてエッジの効いた作品を紹介してきた。そして現在は、フェスティバルの運営方法、舞台鑑賞の暗黙のルール(静かに鑑賞するべきだ、拍手をする場所が決まっているなど)にも踏み込んで、アーティストのみならず、スタッフも観客も、誰もが自由に参加できる環境づくりに取り組んでいる。2017 年度には、カナダのアーティスト・コレクティブのプロジェクトで「チルドレンズ・チョイス・アワード」を実施した。これは、地元の小学生たちがフェスティバルの全プログラムを見た後に、子どもたち自身で各賞を選んで、最終日にアーティストを表彰するプロジェクト。作品の中には裸体表現もあり、「子どもに見せても大丈夫なのか?」という議論もあったが、結局は全部見せることにした。すると、子どもたちのリアクションがほかの観客とはまるで違うことが分かった。同じシーンで笑っている子もいれば、叫んでいる子もいて、とても自由に楽しんでいた。このように鑑賞法自体をもっと自由に捉えられるようになると、フェスティバルを「私の居場所だ」と感じてもらえるようになるのではないかと感じた。

塚原: 僕が主宰する contact Gonzo は、このアワードで「最もヒヤヒヤしたで賞」を受賞した。日本の芸術教育はある種の正解が決められているところもあり、幼い頃から見えないルールに縛られているところがあるように思う。もしかしたら、大学に入ってからその思い込みを解体するのでは、遅すぎるかもしれない。小学校3・4年生ぐらいから、もっと自由な芸術教育ができるとよい。そうすることで、自分は何をしたいのかなど、深い自己理解に繋がっていくと思う。

●日本の移民政策について

ナップ: 安里さんにお聞きしたい。日本は高齢社会に向かっていて、より外国人労働者が必要になると言われているが、日本への移民の法律はどのように変わっていくと思われるか?

安里:ちょうど今から、見直しをする時期に入るだろう。とはいえ移民政策を本格化させて 社会的にも包摂するためには、まずは、「外国人にとって、日本の生きにくさはどこにある のか?」という点を検証する必要がある。例えば、週 28 時間までしか許されない留学生の アルバイトでいいのか、アパートの保証人や携帯番号は必要なのか、来日者にどのような日 本語教育を提供するのか、日本語が十分でなくても進学できるのか、通訳がいなくても役所 や電気ガスなどの対応ができるか、保活のことを知らなくても保育園に入園できるのか、ハ ラルフードは入手できるか、についての対応など、考えるべきことはたくさんある。一方で、 反移民の考えも強いため、どのようなビジョンをもち社会政策を採用するかなどについて も検討する必要がある。

サコ:移民政策は、国と地方自治体という2つレベルで取り組んでいく必要がある。私は長年京都府に協力し、外国人府民にとって暮らしやすい街づくりに取り組んできた。特に課題と感じているのが、災害が起きた時の情報伝達の方法である。差し迫った事態で、日本語を正しく理解することは難しいため、普段から外国人が社会や地域との接点を作っておくことが重要となる。普段から交流の場を持っていれば、地域ぐるみで助け合うことができる。行政のルールのみで管理するのではなく、住民や社会の意識を変えていくことも大切だろう。

安里:私は、京都市役所や区役所では、外国人市民と同じ比率程度には、外国人の職員配置をするべきだと思う。または、せめて区役所に一人ぐらいは外国人を採用してほしい。そうすれば、特に災害時には、頼れる拠り所となって、孤立する人が減るだろう。莫大な予算をかけなくても制度を人々にやさしく改正することはできる。そうすれば、飛び地のように孤立化した外国人集落が生まれることなく、住民との共生がもっとスムーズに進むのではないでだろうか。包摂は本人のためでもあるが、社会コストを生み出さないための予防でもあり、「多様性が豊かさをはぐくむ」前提でもある。

●会場の質問から(抜粋)

質問者:個人的な話になりますが、私は海外旅行が好きなのですが、コロナ禍で海外に出ることができません。日常生活の中で、既成概念やフレームに囚われない視点を獲得するにはどうしたらいいでしょうか?

サコ:私はフレームがあること自体は悪いことではないと思う。モノフレーム(単一視点)になっていることが問題で、マルチフレームであればいい。私の体験でいえば、マリの学校ではフランス語以外を使うことは許されていなかった。しかし家に帰ると、フランス語を使うことはできません。親には「偉そうなことを言うな、まずは挨拶をしっかりしろ」と、学校で習ってきたことすら否定されることもしばしば(笑)。そして、近所に遊びに出かけれ

ば、また家とは違うコミュニティが存在していた。当時の私にとって、学校と家と地域は、全く異なる別の存在であり、三重人格で育ったといっても過言ではない。しかし、そこにはひとつの良さがあったと感じている。ある意味、たくさんの逃げ場があるので、このフレームで行き詰まったら異なるフレームに行けばいいのだから。現在の日本は、ワンフレームの価値観しかないから、行き詰まったときの行き場がない。だから意識的に、自分で「他の行き場を作ること」が大切になると思う。

安里:京都の東九条に「コミュニティカフェほっこり」というコミュニティスペースがある。 以前はこの地域は在日コリアンが多かったが、最近はニューカマーのフィリピン人が増え ている。そこで、行政の助けも得ながら、オールドカマーとニューカマーが共同でカフェを 企画していろんなプログラムを作って、外国の料理を提供したり、イベントを開催してい る。そして、今では地域の誰もが気軽に立ち寄れる場所になった。ニューカマーにとって新 しい居場所を作ることは決して簡単ではないが、地域住民や行政の理解があれば、こんな展 開も可能である。

サコ:私は、Go To トラベルはコロナ禍の政策として失敗だったと思っている。これは「Go To 地元」で良かったのではないか。コロナ禍によって、これまで見えていなかった多様性が京都にもたくさんあることに気づいた人は多い。地元の魅力に気づくことで、自分にとって新しい居場所を見つけたり、新しい価値観を作っていく助けになると思う。今後はそうしたローカルの可能性にも注目してほしい。

ナップ・塚原: 安里さん、サコさん、本日はありがとうございました。KYOTO EXPERIMENT にとって参考になる提言もたくさんいただくことができた、素晴らしい機会となりました。 ありがとうございました。

「*シンポジウムを元に一部を抜粋、再編集してまとめています」